

小田実

人間みな

チヨボチヨボや

毎日新聞社

小田実

人間みな
チヨボチヨボや

人間みなチヨボチヨボヤ

定価1400円

1985年9月25日 印刷

1985年10月10日 発行

著 者 小 田 実

編集人 川 合 多喜夫

発行人 関 根 望

発行所 毎 日 新 聞 社

●100 東京都千代田区一ツ橋

●530 大 阪 市 北 区 堂 島

●802 北九州市小倉北区紺屋町

●450 名古屋市 中 村 区 名 駅

印刷／精文堂印刷

製本／大口製本

※ 目 次

「ゴクラクの路地」の話	9
シンジン寺の話	13
骨を流す話	17
骨を拾う話	21
深夜のモモタロサンの話	25
「先輩市民」の話	29
ヤンキー魂万才！	33
「ロン」の「私兵」でない軍隊	37
とまらないエレベーター	41

オハライと原爆・ミサイル

私の「国会見物」

ふしぎなカメラ

「社会主義なき社会主義社会」

世界でもっとも知られていない国

「ロボットの国」としてではなく

三種の神器

人間の顔をした社会主義

「民衆楽園」の話

「ベトナムばあさん」

中国裁判傍聴記

金さんのアメ

「バイ、バイ、バイ」

93 89 85 81 77 73 69 65 61 57 53 49 45

中国英語踊躑躑躑リユータリユータ

97

中国2DKでの御馳走

101

丸山薫先生

105

中国人民奮闘す

109

「ユータイ」と「ニホングンバツヲウチタオス」

113

「世田谷浪人文庫」

117

小さな「歴史的」パーティー

121

「街上流行紅裙子」

125

「習字」嫌い

129

さまざまな中国

133

現地食主義

137

「八月六日」の中学一年生

141

民衆のつきあい

145

中国家庭における「労働の分配」
ディ・ジョン・オブ・レイバ

149

中国「辺境」ばなし その一

153

中国「辺境」ばなし その二

157

「第三世界」国際列車

161

一族再会

165

死はあまりにも突然に

169

「偉大な市民」の死

173

《Cause》とイメージ

177

《ヒューマン・コンスクエンス》

181

私の友のインド人たち

185

神風を信じ始めたアメリカ合州国人

189

ガキ大将「神話」に反対する

193

ひとまたぎのコンクリートの帯

197

まっとうな「市民感覚」

「カール・ビンソンスキー」入港す

「自民」共産」の連立

「曲学阿世」VS.「平和の船」

私のお正月

校歌、校歌、校歌……

近ごろになく面白い話

私の「アカ」嫌い

読めない出版物

「ゆとり」を削って「ゆとり」をつくる？

何でも「事始め」

「メロス」の教訓

小さな、重い旅

201

205

209

213

217

221

225

229

233

237

241

245

249

サルトルと中野好夫

253

「ここ（ヒヤー）」国と「秋にでも……」国の話

257

ヘンな人の話から

261

アジア人の「成功談」？

265

「権利教育」としての「義務教育」

269

見ると聞くととは……

273

あでやかな笑顔

277

「学校」はどこに行った？

281

「人間の国」に行つて来た

285

古くて新しい命題

289

あとがき

人間みなチヨボチヨボや

「ゴクラクの路地^{ろじ}」の話

この連載、何を、どう書いてもいいというので引き受けた。これは私のライフスタイル——とひところはやったカタカナ語で言うのも何やら気恥ずかしいので、私流に言うと、くらしのやり方だが、そのやり方にふさわしいし、私の人生、社会、政治、経済、文化、風俗……人間のよろもろにわたつての「人間万事古今東西チヨボチヨボ」の平等哲学にふさわしい。この平明きわまる哲学をさらに平明にして、題して「人間みなチヨボチヨボや」。まあ、ボチボチ始めてみようか。

お正月なので、めでたくゴクラクの話をしてみたい。ゴクラクというより「ゴクラクの路地^{ろじ}」の話だ。

私は大阪は四天王寺の近くで育った。大阪流の言い方で言うと、「天王寺はん」だが、「天王寺はん」はなかなかゴクラクにかかわりのあるお寺なのである。経木を流す井戸には大きな石の亀がうずくまっついていて、口から吐き出す水はゴクラクの水だ。

「西門^{さいもん}」という名で大阪人に知られた交叉点から「天王寺はん」に入って行くと、とつつきに「日本仏法最初」とか書いた額をかけた石の大鳥居が立っている。戦災で火焰の洗礼を受けて全体がくろ

ずんでいるし、ところどころ剝げ落ちてもいるが、この古い石の大鳥居、実はゴクラクの東門なのである。そして、そいつをくぐり抜けて一〇〇メートル近く両側ににぎやかに露店の並ぶ石畳の道を歩くとお寺の西門に達するのだが、その別名ゴクラク門と称する西門は（こちらは戦災で焼けての再建のゴクラク門だ、「天王寺はん」の西門であると同時に現世の西門である。つまり、ゴクラクの東門と、現世の西門が一〇〇メートルの距離をへだてて接していることになる。

このゴクラク門、石の大鳥居ひつくるめての「天王寺はん」の西門は、古来、浄土信仰で西方浄土、ゴクラクに至る道として有名な場所だった。「西門」の交差点から「天王寺はん」と逆の西方へむかつてはゆるやかな傾斜で下るようになっていて、往古は石の大鳥居を出たところから海になっていた。新世界からミナミの盛り場にかけてのにぎやかなあたり、海の底に沈んでいたというわけだ。あるいはそのあたりがゴクラクであったかも知れない。

いつか大金がころがり込んで来たら、「ゴクラク」という名のスナックでも出してみたいものだ。

一遍上人絵巻で（私は複製を見ただけだが）、その海のはてのゴクラクめざしてゴクラク門から石の大鳥居にむかって目隠しをして、お互い肩に手をかけながら一列になって歩く白い衣の一団の絵を見たことがあるが、ついでもうひとつ昔からの言い伝えを書いておくと、おヒガンの中日の夕刻、ゴクラク門に立って西方を眺めると、石の大鳥居の額にうまいこと落日がひっかかってそこから光の矢が四方八方にのびる。これすなわちゴクラクの光なりということだが、あいにく私はまだ見たことがない。子供のときから何度もおヒガンの中日にゴクラク門に立っているのだが、あいにくいつも曇っていた。

それにしても西門には、どうして、現世の西門、ゴクラクの東門と二つ門があるのか。二つあわせてひとつの門にしてしまえばよさそうなのに二つの門があつて、しかもそのあいだが一〇〇メートル

ほども離れている。これではせっかくゴクラクにむかつて「入水」しようとして現世の西門を出た白衣の連中も、ゴクラクの東門に達するまでに途中のにぎやかな露店に氣をとられて心変わりがして引き返して来るのではないかという氣がしないでもない。あるいは、ゴクラクのほうでも、おまえはこつちとの死に神と打ち合わせなしに自由意思で現世をおん出て来てしまったのだからと言って引き取りを拒む。しかし、いったん現世を出てしまつたら、引き返せるわけはないにちがいない。とどのつまり、二つの門のあいだの石畳の道の上をウロウロしているほかはない。

こんな奇妙なことを考え出したのは、実はベトナム反戦運動に加わつて、ベトナムの前線から脱走して来たアメリカ合州国の若い兵隊さんを日本にかくまって四苦八苦していたさなかだった。いったん反戦の志を立てて、国家のしがらみと人びとにとらわれて生きている現世をエイヤツとばかりに出て来たものの、石の大鳥居のむこうのゴクラク浄土にはなかなか行き着けない。これは実際に引き受け国への「運搬」の都合がつかないということでもあるが、もうひとつ、脱走兵という存在、究極的、原理的には国家の存在をまるごと否定している存在であつて、「国家がない世界」ができ上がらないかぎり、行き着く先のゴクラクはないのだ（これは私たちが送り出した脱走兵をあまた引きとつてくれたスウェーデンの軍隊から脱走兵が出た場合を考えれば、立ちどころに判ることだろう）。

そこで、結局、二つの門のあいだでウロウロすることになる。ウロウロしているあいだに志を立てたときには、神のごとき心を持った英雄だった彼らもたちまちモトのモクアミ、彼らが本来そうであったふつうの人間、タダの人に立ち戻つて、女と寝たくなる、麻薬もやりたくなる、ケンカをする、いろんなことがあつた。いろんなことがありすぎて、つくづく考えるようになったのかも知れない。どうして二つの門があつて、そのあいだに一〇〇メートルほどの石畳の道があつたりするのか。

石畳の道の両側には下駄の台屋、七味唐がらし屋、オモチャ屋、信玄袋屋……などにぎやかに露店

が立ち、露店の後ろ、片側には女子高校、反対側には消防署までがあつて、現世の西門から現世を出たつてなんの変わりもないのである。

その現世の西門に立つて石畳の道を見ているとゴクラクから現世に来る人、現世からゴクラクへ行く人、いろいろあつて面白い。

何度もそんなふうに見ているうちに、私はいつのまにかそのにぎやかな石畳の道をゴクラクの「路地」と心ひそかに呼ぶようになっていた。

そのうち、これは私のような、あるいは、私が相手にしたようなふつうの人間、タダの人にとつてなかなかガンチクのあることだと気がついた。ふつうの人間、タダの人も志をたてて現世利益の西門からゴクラクめがけて外におん出してしまうことだつてある。しかし、ゴクラクの東門からゴクラクめがけて「入水」できるのはよほど立派な人物だけだろう。とすると、われらタダの人は「ゴクラクの路地」をウロウロするよりほかにないことになるが、こういうわれらにとつて「成仏」があるとすると、ウロウロしているなかでの居ぬきの「成仏」以外にはあり得ないような気がする。

いや、「成仏」などがあるのかどうか。「ゴクラクの路地」のむこうにも、ゴクラクなどまるつきりないのかも知れないのである。

これは何も信心にかかわつてだけのことではない。

革命というような政治的事業についても言えることだろう。

シンジン寺の話

お寺の話を今少し書くことにする。私はかなりお寺好きのほうだと思っている。

通りがかりに面白そうなお寺を見ると入ってみたり、これはと見当をつけて出かけてみたりする。もつともこれは立派な仏像があるというので出かけたなり、いかめしく、またセンチメンタルに「古寺巡礼」の旅に出かけるというのでもないようだ。人がお詣りに来て、先祖さんよ、おフセあげてお経読んでもらうから安心してゴクラクで寝ていてくれなはれ、ホトケはんよ、おサイ銭あげるよつて、わたしら一家元気でいられるようたのみまつせ、ついでお金も儲かるようにな。ああ、それから息子も高校に入れますように、娘もええムコさん見つけられますようにと、欲深にいくらかも虫のいい願いごとをやつてのける——そんなお寺が性にあつていいのか、私は好きだし、出かけるのはそんなお寺だ。信仰とか信心とか言うと、何やらかめしくなる。シンジンと書いておこう。そのシンジンが生きているお寺である。

私が大阪の四天王寺——「天王寺はん」を好きなのは、子供のころからそのそばで育つて、しょっちゅう出入りしていたこともあるが、そういう人びとのシンジンが何やら生きているお寺であるから

だ。「天王寺はん」の「ゴクラクの路地^{ろぢ}」の話は前回に書いたが、あれはなかなかゴクラクに縁が深いお寺で、しかも、このゴクラク、人びとにとってかなり近づきやすいゴクラクであるようだ。修行何十年、枯れ木のごときひからびた体軀となつてようやく到達し得るゴクラクではないようである。境内の中心の亀の池の近くに亀の井戸があつて、四角い石組みの浅い井戸の底に大きな石の亀がうずくまっている。その石の亀がたまなく口から吐き出しているのがゴクラクの水なのだが、おヒガン、おボン、それから毎月二十一日の弘法大師をまつるという「おダイシサン」の日、人はお寺にやつて来ると、まずそこらにいくらかも店を出している（つまり、机と椅子をおいてあるということだ）経木書きのおじいさんに先祖代々の戒名を書いてもらう。そのあと達筆に書いてもらった経木を持つて亀の井戸まで出かけるのだが、そのまえに鐘つき堂で予告の鐘をついておいてもらうという作業がある。亀の井戸では寺の人が経木をヒシヤクに入れて石の亀から出て来るありがたい水をかけてくれる。そこでどういふことになるかと言うと、たぶん、ゴクラクにいる先祖代々氏は、突然、冷水をぶつかけて目をさますということになるのだろう。いや、そういうことのないように予告の鐘は鳴らされている。

このゴクラクの水は飲むこともできる。今どきそんなものが大阪のどまんなかにあるかといふかしむ人がいるが、「天王寺はん」の近くに「コーシンさん」のお寺がある。「コーシンさん」のお祭り日だけはさむがり屋のネコもさむくないのだという奇妙な言い伝えがあり、その日には境内のテント張りの店で北をむいて黙つてコンニャクを食べる——食べれば無病息災、元氣でくらせるといふ奇妙な習慣があるが、さてそのお寺（行きたい方は大阪の南の中心アベノ橋まで行つて「コーシンさん」はどこでつか）と聞かれたし。誰かが必ず連れて行つてくれる）のついそばに井戸があつて、お詣りに来た人びとは自分で勝手にポンプを手で動かして、そこらにいくつもおき去りにしてある空の牛乳瓶やプラスチック